

論文の和文要旨

論文題目

一九三〇年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相
——満洲国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想——

氏名

ウユンゴワ（烏雲高娃）

本論文は満洲国の内モンゴル「知識人」の文化(出版)活動を中心として、彼らの民族意識を考察・分析し、1930年代の内モンゴル人ナショナリズムを検討した研究である。

論文は「序論」、「第1、2章からなる第1部」、「第3、4、5、6章からなる第2部」、「結論」、「補論」から構成されている。

序論では、モンゴル人ナショナリズムは漢人からの離脱運動として始まった自己防衛運動であって、文化運動はその重要な側面として行われたが、満洲国時期に本格化したことを示し、先行研究を検討して、研究の方法と論文の構成を決定した。

1930年代の内モンゴルの状況からみると、日本との協力は内モンゴル人が漢族への「同化」を回避し、「滅亡」の危機を乗り越えるためには欠かすことのできない選択であった。そこには、満洲国・日本を介した教育出版活動の振興、新しい啓蒙思想や経済・軍事思想などの受容を通じて「自立」を目指そうとした内モンゴル「知識人」の懸命な努力があった。ナショナリズムとは政治的単位と文化的単位を統一しようという運動であるが、モンゴル人ナショナリズムをめぐる従来からの研究は政治的方面に焦点を当てたものが中心で、文化活動に焦点を当てた研究は本格的には行われていなかった。

本論文は歴史の政治的裁断はなるべく控えつつ、モンゴル人の「主体的」視点から、当時のモンゴル語刊行物やモンゴル語の教科書など一次資料を利用し、満洲国の内モンゴル「知識人」の民族意識に焦点を当て、1930年代のモンゴル・ナショナリズムを検討した。彼らの豊かな思想内実と歴史的意味を掘り上げた点で、白か黒かという偏狭な民族主義的・二元論による歴史の一面化とは違うものになったと考える。本論文は、内モンゴル「知識人」の意識思想の特質を見るのに、彼らを日本留学グループと非留学グループとふたつのグループに分け、比較・分析する方法

をとった。

第1部では、清末新政の新式教育を受け中華民国初期に登場した第一世代のモンゴル人の「知識人」(モンゴル「知識人」)のヘーシンゲー(非留学グループ)とテムゲト(日本留学グループ)を取り上げ、新しい表現の仕方と内容を持ったモンゴル語の文章、モンゴル文字での出版、モンゴル語文の教科書編纂などを中心としてモンゴル人ナショナリズムにおける教育啓蒙思想および活動の相を述べた。

第1章では、内モンゴルの文化・教育・出版分野において代表的なモンゴル「知識人」ヘーシンゲーの活動を、満洲国成立前と満洲国時期とに、大きく二つに分け、かれの民族意識と教育啓蒙思想を考察した。彼は中華民国時期も満洲国時期も一貫して、モンゴル人は「軍事力」で歴史上に強かったが、現在は「教育力」で立ち上がるのだという考えを持ちながら教育・出版に力を注いだこと、かれの教育啓蒙思想が主に「危機意識」、「集団意識」、「文化(歴史、言語)意識」として現れていることを明らかにした。中華民国時期に彼は漢文化を通じて進歩的な文化・知識・思想を受け入れながら、モンゴル「民族」の「固有文化」を守り発展させ、「漢化」に対抗しようとしたが、満洲国時期には、彼は日本の対モンゴル人文化教育政策を積極的に利用し、モンゴル語の標準化、モンゴル語の教科書内容の近代化にも注目したことを明らかにした。

第2章では、1920年代の内モンゴル人の出版活動をテムゲト(北京の蒙文書社)とヘーシンゲー(奉天の東蒙書局)を中心として論じた。モンゴル語の活字印刷に成功したテムゲトの教育啓蒙思想と民族意識を考察し、さらにモンゴル語の教科書編纂を中心としてテムゲト(日本留学グループ)とヘーシンゲー(非留学グループ)の民族意識と国家観の相違点を述べた。1920年代の内モンゴル「知識人」は独立・自治の希望を持ち、中華民国を完全には自分の国家であるとは認めていなかったことを明らかにした。

第2部では、若い第二世代のモンゴル「知識人」(「新式モンゴル『知識人』」)の成長について見ながら、満洲国の中の新式モンゴル「知識人」の文化、経済、軍事思想や活動を考察し、内モンゴル人ナショナリズムの内実を検討した。

第3章では、北平(北京)のモンゴル人留学生の編集・発行した刊行物『モンゴル／蒙古』を取り上げ、ナムハイジャブ、ダワーオソルのモンゴル語の作品を中心に考察し、また、東京のモンゴル人留学生の編集・発行した刊行物『祖国』を取り上げて、掲載されたモンゴル人留学生の作品や当時の留学生の手紙を中心に彼らの思想を考察した。満洲国成立直前の新式モンゴル「知識人」たちは、中華民国の対モンゴル政策の本質が大漢民族主義であることを認識し、それに対応する方法を考え検討していたことを明らかにした。さらに、新式モンゴル「知識人」は前世代のモンゴル「知識人」よりも広い視野で、あるいは中華民国の枠だけではなく、世界の中

の内モンゴル人という視点から考えていたこと、前世代のモンゴル「知識人」よりも強い「使命感」を持っていたこと、積極的に日本の力を借りて「独立・自治」へ進む方法を考えていたことを明らかにした。

第4章では、モンゴルの政治的独立・自治にとっては、文化・教育・出版以外にも、軍事・経済など多方面の実力が必要であると意識したリーダー的な新式モンゴル「知識人」ハーフンガーを取り上げた。まず、ハーフンガーの民族意識の形成におけるメルセーの大モンゴル主義やヘーシンゲーらの教育啓蒙思想の影響を述べ、かれの民族意識の形成を考察した。次に、満洲事変後のモンゴル独立軍(モンゴル自治軍)への関与や満洲国の中の活動、満洲国崩壊後の活動などを述べながら、かれの民族意識の成熟を考察し、内モンゴル人の日本との協力の目的は全モンゴルの統一や内モンゴルの独立・自治であったこと、満洲国の中で内モンゴル人は文化活動を行いながら、政治的「機運」を待っていたこと、ハーフンガーは満洲国の新式「知識人」の中でも大きな影響力を持ったことを明らかにし、1930年代の内モンゴル人ナショナリズムの発展を検討した。

第5章では、新式「知識人」プフヒシグ(非留学グループ)とハダー(日本留学グループ)を取り上げ、満洲国における文化(出版)活動を考察し、彼らの民族意識の特徴を検討した。非留学グループのプフヒシグは固有文化を守ることを基礎に近代的な文化・知識を受け入れるという民族意識を持っていたが、日本留学グループのハダーは近代的な文化・知識を受け入れることこそ固有文化を守ることができるという意識を持っていたことを明らかにし、「伝統と近代」という視点からモンゴル人ナショナリズムを検討した。

第6章では、日本へ留学し近代的な文化・知識の影響を受けて、満洲国の中で軍事に携わった新式「知識人」郭文通、アスガンを取り上げ、彼らの活動・思想を考察し、モンゴル人ナショナリズムにおける軍事思想の位置を検討した。内モンゴル人の近代的な軍事力の形成において、日本・満洲国が大きく関わっていたことを明らかにした。

結論では、満洲国時期に内モンゴル人の民族意識がさらに発展したことを、新式モンゴル「知識人」を中心として文化出版、教育啓蒙思想が活発化し、経済・軍事方面にも実力を備えていた点から指摘した。満洲国崩壊が内モンゴル人には「独立・自治」の機会を与えたが、内モンゴル人の独立の希望は叶えられなかった。これには、国際社会の情勢など外的な原因はあるが、モンゴル人自身の内面的な原因をも考えてみる必要がある。これについて、当時の「知識人」の思想を通じていくつか指摘した。